

特集②

レコーデイング

RECORDING

プロデューサーとしての

初仕事

中村とうよう

音楽評論家

音楽評論家という看板をかかげ、他人が苦労して作ったレコードのアラをさがしたりケチをつけたりするのを商売にして、いい気であることができるのも、ひとえに、あなた作る人、わたしケナス人、と割り切った立場に立っていればこそ。そのぼくが、何を間違ったか、今回は、作る人の立場にまわってしまった。

もちろん他人の作ったレコードを聞いているばかりではつまらないから、一度は、わたしも作る人、と言ってみたい気持は前からあったが、日頃えらそうなことを言ってる手前、あまりみつともないものを作るわけにも行かず、これまで制作側にまわるチャンスがつかめなかったのである。

芸能山城組のリーダー、山城祥二氏とはかれこれ十年のつき合いで、いまの山城組が合唱団ハトの会と言ったところから、自称応援団副団長（団長は小

泉文夫先生）として、あれこれ注文ついたり、それこそアラもさがし、けなしもしてきた。そうして、このユニークな団体の成長をうれしく見守ってきたつもりである。

ハトの会が芸能山城組と名をかえたころから、彼らはさらに大きく飛躍し始めた。こちらへんでそろそろレコードの吹込みもやっていい段階に来たのではないかと判断し、ぼくのつき合っている数多いレコード・ディレクターの中から、ビクターの岩田くん、白羽の矢を立て、話を持ち込んだのが75年夏のことだった。その後トントン拍子に話は進み、ぼくの予想以上にビクターが力を入れてくれていることは、喜びにたえない。

ぼくはこうして、プロデューサーとし



ての初仕事をさせていたことになる。たわけだが、プロデューサーといっても、音楽的な内容は山城組の自律性にゆだねているし、録音などのテクニツク的なことはビクターの技術陣にまかせているし、ぼくのやることは、た

くさんのすばらしい才能をうまくまとめて大きなエネルギーに結集させるための、まとめ役であり潤滑油であると思っている。

そのまとめ方の狙いというか、エネルギーの方向づけとしては、たんなる異色合唱団の風変わりな合唱レコードを作るといのでなく、これまで日本の音楽界になかったフレッシュなレコードを作って、広く音楽愛好者、ことに若い音楽ファン、日ごろはロックやフォークなど新しい音楽を聞いているヤングたちに聞いてもらいたいということに尽きる。そのためには、収録する音楽が、あふれる生命力とナウな感覚をもったものでなければならぬ。芸能山城組はそうした要請に充分に応えうるだけの力量と方向性をもっていると確信したからこそ、ぼくはプロデューサーに乗り出したのである。

《芸能山城組》

ディスコグラフィ

■ 51年3月5日発売＜デビュー盤＞

「恐山」 渡辺宙明作曲

「銅之劍舞」 山城祥二・芸能山城組作詞、作曲

■ 51年夏発売予定＜セカンド・アルバム＞

ブルガリア、ロシア、グルジア合唱曲「カライモーメ」

「そそり立つ岩」「果てもなき荒野原」「ある日トラカ」他

■ 51年秋発売予定＜サード・アルバム＞

日本民謡、俗曲、わらべ唄

「刈干切り唄」「長持唄」「柳の雨」「たぬき」「わらべ唄」他

いつもは内田裕也くんあたりと、ロックのバイタリティーがどうのこうのとワメいていくくせに、なぜロック・グループならぬ芸能山城組のレコーデイングをプロデューサーとしての初仕事に選んだか、それはレコードのサウンドを聞いていただければ、なっとくしていただけるにちがいない。

これまでさんざん人様のレコードを批判してきたぼくが、これでどうだ、と胸を張って世に問う自信作に、ぜひじっくりと耳をお傾けいただきたい。